



私の  
業務  
komachi's  
point

職長会活動の一環で作成する、安全教育DVDのリハーサルの様子。中野が確認した台本で撮影が進む。

輝け！

けんせつ小町

# 現場監督

中野里美

戸田建設株式会社  
高崎市新体育館建設工事作業所



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

「信頼関係」。この言葉は建設現場において一つの重要なテーマだ。設計と施工。元請会社と協力会社。所長と職員。職長と職人。みな、互いに厚い信頼がなければ成立しない関係性の上で仕事をしている。今回は、職人との信頼関係を築きながら所長を目指す女性現場監督に、さまざまなエピソードを聞いた。

## 物心つく前からの憧れ

「自分の記憶の中で正確に覚えていないくらい小さいころに、普通の家を建てている大工さんを見て、ホントにかっこいいなって思ったんです。理由も何もなく、ただかっこいい、その気持ちだけで今に至っています。でも、やっぱり大工は女の子っぽくないっていう自覚もあって、周りには『お花屋さんになりたい』とか言っていました(笑)」

現場監督・中野里美は、一九九〇(平成二)年、大阪府生まれ、東京都育ち。普通科高校を卒業後、大学の建築学科に進学した。大学で最初に受けた講義で、教授が語りだした「建築物は、手作りなんだよ」の一言に感銘を受けた。「先生は何気なく言ったと思うんです。よく考えたら当たり前ですが、自分が立ったり歩いたりしている建物の全部が、大勢の人の手作りで成り立っているんだって、それを聞いてあらためてすごいことだと思って、そのあとの講義が全然耳に入ってこないくらい感動しました」

## 一足先に現場監督となった姉の存在

「兄と姉がいるんですが、私を含め三人とも理系で、特に三つ年上の姉は電気系の高専を出て、サブコンに就職したんです」

設備会社に入社して現場勤務となった姉は、毎日早朝に出かけ夜遅くに帰ってきていた。

「大変そうだなとは思いましたが、話を聞くとき楽しくそうで。職人さんをすごく大事にしていることも伝わってきたので、私もそういう現場の仕事に興味を持ちました。もし自分がそうになったら職人さんの話を聞けるようになるうって思ったんです」

中野の姉は、現在二十八歳の若さで大規模現場の設備工事の所長を務めている、やり手の現場監督だ。その姿を見て、自身のめざす道も自然と定まっていた。

「施工管理だけに絞って就職活動しました。女性の施工管理は採用しないっていう会社もありましたが、何とか今の会社(戸田建設)に入れました」

## 全てを解決してくれた「ありがとう」

入社一年目は都内の女子校の建設現場に配属され、そこに一年。次にさいたま市内の小・中・高一貫校の現場を経て、現在は群馬県高崎市内の公営体育館の現場に勤務している。

「姉の話を聞いて職人さんとの関係を大切にしようと思ったんですけど、最初に配属された時はこちらが女性ということもあって、周りの先輩や職人さんたちから微妙に距離を取られたんです。みんな私をどう扱っていいのかかわらないっていうのもあっただろうし、私も私で社会人になったばかりで、どう動くべきかわからなくて…」





「所長になるという最終目標に向かって、まずは次のステップである主任を意識してほしいですね。主任になると協力会社の方だけでなくお施主様や設計者と交渉をしていかななくてはなりません。そういう力を身に付けてくれたらと思います」(林所長)

会社を辞めようかというくらい思い詰めていた中野は、たった一つのあいさつをきっかけに、多くの職人たちと信頼関係を築くことができた。

**女性所長を目指して**

現在の中野の勤務先の上長である林賢吾所長は、自身の方針として「仕事では女性として扱わない」という点を挙げた。

「以前の現場で、初めて女性の社員が配属された時に、最初は『女性だから気を遣わなくちゃ』とか思っていたのですが、そもそも前提として他の男性社員と同レベルで入ってきてるわけですから、特別扱いする方がおかしい、と。だから、中野が入ってきた時もそう言ったのです。褒める時も叱る時も、男性と同じようにするってね」

「私も現場でやっていく以上は『いつか所長として現場を持ちたい』って所長に伝えたら、最初に『仕事では女性として扱わない』と言っただけさって。女性として気を遣われ過ぎるよりも、迷いなく仕事に向き合えるので、よかったです」

林所長曰く「職人さん、職長さんとコミュニケーションを取るのがすごく上手」な中野を象徴するのが、以前仕事をした職人と再会した時に言われた一言。

「『がんばっているか？ 早く偉くなってよ。また一緒に仕事しよう！』って言ってもらって。

私の業務  
komachi's point



左/入社2年目で配属されたさいたま市の現場でも一緒に仕事をした山崎職長。右/1日4回、現場を巡回。工程通りに作業が終わっているか、飛散物がないかなどを確認する。

「たった一言の『ありがとう』が、信頼関係を生んだ」

気がつけば、自分自身も周囲との間に距離を取っていた。「仕事をやってもらう」「頼まれた仕事をやる」。お互いプロだから、それで良いはずだが、事務的なやり取りの繰り返しに疑問を感じ始める。新人だった中野は、そんな悩みを抱えて不安を募らせていった。

「そんな時、当時担当だった内装工事の職長さんが些細なことを頼んできて、それをやったら、本当に子どもみたいな笑顔で『ありがとう』って言うてくれたんです。それがすがすがしい

くらい気持ちのいい『ありがとう』で、それまでの不安やら何やらがすーっと消えて、『ありがとうってすごい！』って」

「それから、ほんのちよっとしたことでも『ありがとう』って言うように心掛けたら、それまで距離を置いていた職長さんや職人さんも一歩踏み込んでくれるようになって、仕事もスムーズにできるようになって、『あれっ？ すごいな』と。いつか、その職長さんに仕事で恩返しできるように成長したいですね」

私の仲間  
komachi's point



上/戸田建設(株)・林所長、職員や職長会のみなさんと。「現場勤務の一番の魅力は、すごくたくさんの人と出会えて、人間関係・信頼関係を築いていけることですね」(中野)。下/中野が勤めている、高崎市新体育館の建設現場。JRと上信電鉄の線路に挟まれ、敷地いっぱい建物建つという難しい現場だ。

komachi MEMO

「今度河川敷で職人さんたちとバーベキューをやるんです。乾杯はジンジャーエールですが(笑)取材時は10月上旬の暑い日。お互いを思いやる家族のような現場を持ちたいという中野の思いが感じられるエピソードだ。



### profile

なかの・さとみ●1990(平成2)年、大阪府生まれ、東京都育ち。幼少より大工仕事に興味を持つ。普通科高校を卒業後、建設業への就職をめざして大学の建築学科に入学。工事現場で働く姉の影響もあり施工管理の職を希望して戸田建設(株)に入社。東京・埼玉の学校建設現場を経て、2015年より現在の高崎市新体育館建設工事作業所に配属。

プレッシャーでもありますが、自分の成長を楽しみにしてくれる人がいるっていうのは、何よりも励みになりますね。いつか、そういう信頼できる職人さんたちと、一つの家族みたいな現場を持ちたいです」

### 女性も男性も働きやすい環境を

建設業界に身を置く者として、福利厚生にも考えるところがある。

「女性が入ってきやすいようにって女性ばかり優遇していると、もともとそこにいた男性からしたらなぜ女性ばかり…と思うかもしれない。女性の福利厚生と同じくらい、男性もそれを取しやすい環境を整備していく方がいいんじゃないかな、と思いますね。若い女性が増えてきたら、同世代の男性が同じ状況で同じように育児休業や在宅勤務といった制度を使えるようにするとか」

最後に、この業界を志望する女性へのメッセージを…。

「建設業全体で労働力不足っていう背景があって女性が注目されているので、女性にとっては今がすごくチャンスだと思います。その分、周囲の期待とか理想も高くなってもいますが、私たちより上の世代の方々がすでに活躍して、働きやすい環境が整いつつあるので、『男性社会だから』とか思わずに、モノづくりへの思いを持って突き進んでほしいですね」